

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座六の十八の二演舞場B二
電話(五四二)五四七番

清元協会

港区西麻布一の二の三の四八五
電話(四〇五)八〇〇番

財団法人 古曲会

中央区築地四の二の七の九〇二
電話(五四五)三七七八番

新内協会

品川区旗の台六の二十七の二
電話(七八一)三九五番

常磐津協会

目黒区上目黒四の三十三の十四
電話(七二五)一五一八番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四
電話(五四二)六五六番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二の十五の十二の四〇三
電話(五八五)九九一六番

(五十音順)

後援 東京都

昭和六十一年三月九日(日)

第一生命ホール

第一部 十二時半開演 四時終演

第二部 四時半開演 八時終演

'86 都民芸術フェスティバル

第十六回

邦楽演奏会

— 邦楽名曲選 —

'86都民芸術フェスティバル参加公演（昭和60年度東京都助成公演）

分野	種目	団体名	演 目	公演数	期 日・会 場	入 場 料 金	問 合 せ 先
音	オペラ	(株)日本演劇協会	山田耕祥 「黒 船」(日本演劇協会)	2	1月8日・9日 東京文化会館	8,000~1,500円	(社)日本演劇協会 (478)5670
			ヴェルディ 「仮面舞踏会」(原語上演) (日本オペラ振興会)	3	2月4日~6日 東京文化会館	8,000~1,500	(財)日本オペラ振興会 (371)5384, (369)7020
			J. シェトラウス喜歌劇「こうもり」 (訳詩上演)(二期会オペラ振興会)	4	2月19日~22日 東京文化会館	8,000~1,500	(財)二期会オペラ振興会 (370)6411
	室内楽	邦楽連盟	第 17 回 都民のための コンサート	オーケストラ	5	1月19日~2月16日 東京文化会館	2,200~1,000
室内楽	1			2月20日 東京文化会館	2,000		
ジャズ	1			3月1日 日本青年館ホール	2,500	(社)日本演奏連盟 (437)6837 フェスティバル (400)9999	
邦楽	邦楽連合会	邦楽連合会	第 16 回 邦楽演奏会	2	3月9日 第一生命ホール	1,500	邦楽連合会 (545)3778
演劇	新劇	新劇団協議会	W. サローヤン 「君が人生の時」 (合同公演)	14	2月12日~23日 よみうりホール	3,000 定時制高校生招待有	文化座(828)2216, 東演(419)2871, 地人会(354)8361
	児童劇	日本児童演劇団協議会	「ふしぎの国の帽子のはなし」 (人形劇・影絵劇合同公演)	28	1月24日~3月9日 東京都児童会館 外16会場	当日 2,000 前売り 1,600	日本児童演劇団協議会 (409)1797
舞	バレエ	独日本バレエ協会	「眠れる森の美女」	4	3月5日~7日 東京文化会館 3月16日 市川市民会館	5,000~1,500 中生無料招待有	(社)日本バレエ協会 (462)5524
		東京バレエ協会	「ジゼル」 「動と静」—アブシベルの幻覚—	3	2月10日・11日 東京文化会館	5,000~1,500円	(財)スターダンスバレエ団 (401)2252
	現代舞踊	現代舞踊協会	「アントラクト—まつりのカラーージュ」 「モノクローム・ラプソディー」 「大地」	2	1月14日・15日 東京文化会館	3,000~2,000 無料招待有	(社)現代舞踊協会 (400)4544
	日本舞踊	日本舞踊協会	第 29 回 日本舞踊協会公演	6	2月13日~2月15日 国立劇場	5,000 無料招待有	(社)日本舞踊協会 (533)6455
古典芸能	能	(財)能楽協会	都 民 能	1	1月18日 国立能楽堂	2,500	(社)能楽協会
			翁 付 式 能	1	2月16日 国立能楽堂	4,500	(574)6441
	民俗芸能	民俗芸能大会実行委員会	第 17 回 東京都民俗芸能大会	2	3月8日 杉並公会堂 3月9日 八丈町大賀郷公民館	無料招待	東京都民俗芸能大会実行委員会事務局 (894)8922(松本), (842)6911(宮尾)
寄席芸能	寄席芸能実行委員会	第 16 回 都民寄席	8	2月4日~2月22日 葛飾公会堂 久7会場	無料招待	都民寄席実行委員会事務局 0423(81)5534	
4分野	12種目	11団体		87公演	32会場		

◎これらの個々の公演の詳細についてのお問合せは、各団体に、助成公演全般についてのお問合せは、東京都教育庁社会教育部文化課（電話 212-5111 内線 44-531, 44-532）へお願いいたします。

'86都民芸術フェスティバルによせて



東京都知事 鈴木俊一

今年も都民芸術フェスティバルのシーズンがやってまいりました。このフェスティバルは、へすぐれた芸術を、心ゆたかな、くらしの中へのキャッチフレーズのもとに、東京都が芸術文化団体の公演を助成し、都民の皆様へ優れた舞台芸術を鑑賞していただくという催しで、今回で十八回目を迎えました。芸術性の高い公演内容と最高の芸術を提供し

ようという出演者の方々の意欲、及び都民の皆様の熱い声援によって、この催しも東京の代表的文化行事としてすっかり定着してまいりました。誠に嬉しい限りであります。

私はいま、とかく心のゆとりやうるおいが失われがちな大都市東京に、人とのふれあいや思いやりを取り戻し、都民の誰もが、安心していきいきと暮らすことのできる「マイタウン東京」の実現に向け、都政の全力を傾けて努力しております。芸術文化は、私たちの生活に豊かな心とゆとりを与えてくれるものとして、その振興に力を尽くしているところであります。

このフェスティバルに、一人でも多くの都民の皆様が参加し、楽しんでいただけるようお願い申し上げます。また、このフェスティバルに参加して下さった邦楽連合会の心に残るすばらしい公演を心からご期待申し上げます。

第一部 番組 (十二時半開演)

一、一中節 三 番 叟

浄瑠璃	都	一いそ	三味線	都	一いき
同	都	一いま	同	都	一ゆき
同	都	一みき	同	都	一さき
同	都	一たき	同	都	一いよ
同	都	一いせ			

二、清元道行旅路の花聲 (落人)

浄瑠璃	清元	延千之輔	三味線	清元	延初代
同	清元	延千之丞	同	清元	延初喜祢
同	清元	延輔優	上調子	清元	延千恵広

三、尺八三谷管垣

琴古流本曲

青木慕	青木督	青木峰	村松	竹内	佐野	北原	高橋	高橋
鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴
佐野	横田	金野	実方	片倉	吉崎	吉崎	船明	林
鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴
秀	琥	道	雀	香	盛	盛	邦	森

四、新内帰咲名残の命毛 (尾上伊太八)

浄瑠璃	岡本	伊都子	三味線	富士松	菊三郎
上調子	新内	勝次朗			

明烏六花曙

五、義太夫

浦里
時次郎

山名屋の段

浄瑠璃 竹本 土佐廣
三味線 鶴澤 寛八

六、常磐津

仮名手本忠臣蔵

—大 序—

浄瑠璃 常磐津 文字太夫
同 常磐津 小文字太夫
同 常磐津 八重太夫
同 常磐津 清若太夫
三味線 常磐津 文字兵衛
同 常磐津 八百八
上調子 常磐津 八百二

七、長唄八重霞賤機帯

唄 芳村 孝次郎
同 松永 鉄庄治
同 芳村 伊知蔵
同 松永 鉄次郎
三味線 松永 鉄五郎
同 松永 忠五郎
同 松永 鉄九郎
同 松永 鉄史朗

囃子

笛 鳳 晴 郷
小鼓 望 月 左喜三郎
立鼓 堅 田 喜四郎
大鼓 堅 田 喜三郎
太鼓 藤 舎 清 晃

第二部 番組 (四時半開演)

一、箏曲冬の曲

箏本手 川瀬白秋
高橋翠秋
白石昌秋

箏替手 山崎扇秋
村山朋秋

尺八 デビッド・ウイラー

繪本太功記

二、義太夫尼ヶ崎の段

光秀 竹本素八
さつき 竹本越道
みさを 竹本綾之助
初菊 竹本駒之助
十次郎 竹本朝重
三味線 鶴澤重輝

三、新内若木仇名草(蘭蝶)

浄瑠璃 新内 勝英太夫

三味線 新内 勝史郎
上調子 新内 仲一郎

四、常磐津神路山色瑛

油屋縁切

浄瑠璃 常磐津 清勢太夫
同 常磐津 津太夫
同 常磐津 清若太夫

三味線 常磐津 菊助
同 常磐津 一寿郎
上調子 常磐津 啓寿郎

五、宮 菌 鳥

辺 山

浄瑠璃 宮 菌 千 佳
同 宮 菌 千 祐 三
同 宮 菌 千 有 紀

三味線 宮 菌 千 愛
同 宮 菌 千 萬

六、清 元 能 色 相 図 (神田祭)

浄瑠璃 清 元 登志寿太夫
同 清 元 成美太夫
同 清 元 梅喜太夫
同 清 元 三枝太夫

三味線 清 元 梅 吉
同 清 元 吉 寿 朗
上調子 清 元 吉 志 郎

七、長 唄 勸 進 帳

唄 柏 庄 太郎
同 和歌山 富司郎
同 松島 藤次郎
同 柏 庄 一郎
同 柏 庄 六

雛 子

三味線 杵 屋 六 三 郎
同 杵 屋 長 之 助
同 杵 屋 六 哲 郎
同 杵 屋 六 進 次
上調子 今 藤 美 治 郎

笛 中 川 善 雄
小鼓 望 月 太 喜 之 丞 宏
同 望 月 太 喜 之 丞 宏
立鼓 望 月 太 喜 雄
大鼓 望 月 左 武 郎

歌詞と解説 (演奏順)

(解説 竹内道敬)

第一部

一、一中節 三番 叟

河竹黙阿弥作詞、初世都一広作曲。明治十九年開曲。昭和三十四年に二世都一広補作。

一中節というのは、元禄のころ京都で生れた浄るりて、邦楽の中では古いものです。それがやがて江戸に移され、現在では、都、菅野、宇治の三派があります。一中節は邦楽の古典といわれ、格調の高さを誇っております。能の「翁」が音曲に入ってから、儀式の場合にのみ翁が尊重され、旋律の面白さはむしろ三番叟に集められました。したがって、この三番叟も、古曲として一中節の、旋律を樂しむように作られたもので、この演奏会の幕開きにふさわしく、荘重にして華麗な演奏をおきかせいたします。

へとうく／＼たらり、たらりら、へたらりあがり、ららりどう、へ所千代

本来の「仮名手本忠臣蔵」にはない場面だが、人物設定もおもしろく、曲もすぐれているので、現在ではなくてはならない場面となっている。なお、時間の都合で、鷲坂伴内が出てくるくだりは省略いたします。

へ落人も、見るかや野辺に若草の、薄尾花はなけれど、世を忍び路の旅衣、着つつ馴れにし振袖も、どこやら知れる人目をば、隠せど色香梅が花、散りてもあとの花の中、いつか故郷へ帰る雁、まだはな寒き春風に、柳の都あとに見て、気も戸塚はと吉田橋、墨絵の筆に夜の不二、よそめにそれと影暗き、鳥の啼をたどり来る。
へ鎌倉を出てよう／＼と、ここは戸塚の山中、石高道で足は痛みはせぬかや

へ何のまあそれよりは、まだ行先が思われて
へそうであろう、昼は人目をばかるゆえ
へ幸いこの松蔭で

へしばしがうちの足休め
へほんにそれがよからうわいなあ
へ何もわけなき憂さ晴らし、憂きが中にも旅の空、初ほとときす明け近く、クドキ、色で逢いしも昨日今日、かたい屋敷の御奉公、へあの奥様のお使いが、二人が塩治の御家来で、その悪縁か白猿に、よう似た顔の錦絵の、カンへこんな縁しが唐紙の、鴛鴦の番いの楽しみに、(中略)
へ空さだめなき花曇り、暗きこの身の繰り言は、恋に心を奪われて、お家の大事ときいた時、重きこの身の罪科と、かこち涙に目もうるむ。
へよく／＼思えばあとさきのわきまもなく、ここまでは来れども、主君の大事をよそにして、この勤平は所詮生きてはいられぬ身の上、そなたはいわば女子の事、死後の甲い頼むぞや、お軽さらばじゃ

「あれまた死なしたらん、私も死ぬるその時は、あれ二人心中じやと、誰がお前を褒めますぞえ、さ、この道理をききわけて、ひとまず私が在所へ来て下さんせ、父さんも母さんも、それは／＼頼母しいお方、もうこうなつたが因果じやとあきらめて、女房のいう事も、ちつとはきいてくれたがよいわいな」

までおわしませ、われらも千秋さむらおう、鶴と亀との齡にて、さいわい心にまかせたり。へ鳴るは滝の水、鳴るは滝の水、日は照るとも、絶えずとうたり、ありゆうどう、絶えずとうたり、久方の、天津乙女の舞の袖、かざす千歳の松と竹、世々はふれども色変えぬ、深き妹背の語らいは、天の浮橋二神の、教えを伝う秋津国。
三下りへ千早振る神のひこさの昔より、久しかれとぞ君が代を、寿ぎ祝う白菊の花の名に呼ぶ翁草、一さし舞おう萬歳樂。へおおよさえおおよさえ喜びありや、喜びありや、わがこの所より他へはやらじと思う。へああらめでたや年立ちて、春の朝のうららかに、霞棚引く空に舞う、声辺の田鶴の羽をのして、友呼び交す啼く音さえ、
二上りへゆたかに住むや住の江の、へ磯馴れの松へ打ち寄する、波の鼓の拍子に連れて、船櫂を立てて。国の宝のたなつもの、へ君へ貢の百千船、静けき御代に風立たで、四つの海原おだやかに、東の都賑わしく、千秋萬歳萬々歳と、祝い奏でて舞い納む。

二、清元 道行旅路の花髻 (落人)

三升屋二三治作詞、初世清元栄次郎作曲(異説もある)。天保四年(一八三三)三月、江戸河原崎座の「裏表忠臣蔵」三段目の裏に初演された。

早野勘平は腰元お軽との色事にふけたばっかりに、判官のお供にはずれ、主君の大切な場にいることができなかつた。それをくやんで自害しようとするのをお軽がとどめ、とりあえずお軽の実家山崎へ落ちて行こうとする道行。

クドキへそれその時の、うろたえ者には誰がした、みんな私が心から、死ぬるその身を、へながらえて、カンへ思い直して親里へ、連れて夫婦が、へ身を忍び、へ野暮な田舎の暮しには、機も織り候、賃仕事、常の女子といわれても、取り乱したる真実が、へやがて届いて山崎の、ほんに私があれば抱き付き、言葉に色をや含むらん。(中略)
へもはや明方、人目にかからば二人が身の上
へあれ山の端の
へ東が白む
へ横雲に

へ啼をはなれ鳴く鳥、可愛い／＼の夫婦連れ、先は急げど心はあとへ、お家の安否いかがぞと、案じ行くこそ道理なれ。

三、尺八 三谷菅垣

琴古手帖によると、肥前国長崎正寿軒にて一計子より黒沢琴古が伝えられたと記されています。

古伝三曲のような経典曲と異なり、外典曲として一般に吹かれており、本曲のなかでは一般になじみ易い曲です。
三谷と名のつく曲は、本曲中にくつかりありますが、琴古流本曲であるこの三谷菅垣がもっともよく知られております。
三谷というのは、文字通りに三つの谷と解釈する考え方が(古来靈鳥とされている鶴は、巣をいとむ際に、水源が三つある場所、つまり三谷をえらぶとされている)、三谷は三味の意で、心を定め安定した状態に入るといふ禅思想から発したとする考え方があります。
また、菅垣というのは、箏の手法の「スガガキ」から由来

するといわれています。つまり歌なして演奏する弦楽器の曲という意味ですが、これがいづ、どのようにして尺八本曲の名称になったのかは明らかではありません。別に、神前で奏する和琴の弾き方だともいわれております。

演奏は一尺八寸の本手と二尺の替手で演奏する事が多いのですが、まれには一尺三寸の曙調子を加える事もあります。

四、新内 帰咲名残命毛 (尾上伊太八)

かえりさき なごりのいのちげ

伊太八は界屋の尾上と馴染んでもう二年、そのため親からは勘当、金に困っている。一方の尾上も幼い時に両親に別れ七つの歳から吉原で育った身の上である。その尾上に身受け話もちあがって、明日にもひかされそうなのだが、伊太八はどうすることもできない。金の工面をしていくと、いつかやっとならば愚痴ばかり、そして男が脱いでみせた肌着は白無垢、尾上も簾筒をあけて、死装束に着替えるのであった。

実際の心中事件にヒントを得て、鶴賀若狭掾が作った新内節端もの代表曲。時間の都合で、もともとよく知られている尾上のクドキを中心にした下の巻を演奏する。

「あとに尾上は伊太八が、顔つくづくとうち眺め、尾上「私という者ないならば、こうした身にもならんすまい、親御様の御勘気も、みんな私が仕業ぞや」

「逢い初めてより一日も、鳥の啼かぬ日はあれど、お顔見ぬ日はないわ

つまって男は勘当、女は他の客を断るといので、借金はふえるばかり。二人はしめし合せて廓をぬけ出し、三河島田浦あたりで心中ということになった。

この事件をとりあげて脚色したのが初代鶴賀若狭掾で、ニユース性の強い浄瑠璃だったが、名曲としてまた新内節の代表曲として、「蘭蝶」「伊太八」とともによこばれている。

はるか幕末になって、弘化四年(一八四七)大阪で歌舞伎に脚色されて好評を博し、のち嘉永六年(一八五三)には義太夫に脚色されて、大阪新築地の綱太夫座で初演された。そのため、むしろ上方の廓気分が濃厚に含まれているし、人物設定も新内より複雑になっている。

春日屋時次郎は、主家の重宝金岡の臥竜梅の一軸を紛失、勘当をうけている。その詮議のために廓に入り込み、いつか山名屋の遊女浦里となじみを重ね、二人の間には禿になつてあるみどりという子までなした仲である。浦里は時次郎との仲をせかれ、表向きには逢えないでいる。時次郎は浦里とみどりに逢いたいものと、堀の外に忍んで来ると、髪結いのお辰のおかげで久し振りに逢うことができたが、そこへ遣手のおかやの声。

このあと浦里とみどりはおかやに折檻される。それは亭主の勘兵衛がさせたことだったが、一軸の犯人は亭主であったことがわかり、やがてその一軸を手に入れた時次郎は、浦里とみどりを連れて立退くのである。

時間の都合で一部を省略して演奏します。

「座敷も静かなる、雪はまだ、残りて寒き春の風、吹き晴れぬ身の浦里が、湯上り姿そのままに、禿の緑打ち連れて、上る二階の部屋の内。それと緑が煙草盆、煙に髪さは晴らして、暗れぬ思いの時次郎、誰恋人と夕間暮、せかれて今は山名屋の、浦里にさえ怨めしく、人目の関を忍ぶ身の、雪の夜道を迷い来て、堀の外面にしよんぼりと。

「ああ浮世の中とはいいなながら、水の流れと人の行末、せんだつて御主

いな、しげしげ逢えばお宿の首尾、悪しきは胸に知りながら、好いたが因果束の間も、そば離るるがいやまして、朝の帰りもまだ早い、もう一服と抱きしめし、その言の葉が居続けと、しげりし故にお前の身、仇となしゆく悲しやな、許して下んせ八様と、手を合わせ伏し拝み、思わずわつと泣き出す。

伊太八「これやかましい、静かにしや」

尾上「やあ、お前はよう寝て」

伊太八「はて、どう寝られうぞ、まずこちらへおじゃ」と、

「床の内、あたりの襖たてこめて、しばし物をもらわざりしが、(中略)

「尾上はいとどしやくり上げ、好かぬことをいわしやんす、いかに流れの身じやととも、心に二つはないわいな、たとえ私が請け出され、御新造さんの奥さんのと、人にかしづき敬われ、上見ぬ驚で暮らしても、いやな男に添い寝して、朝夕気がねをするよりも、やっぱり二人が手鍋提げ、手づから私が飯焚いて、内の者よ、こちの人、明日はどうして、こうしてと、いうが楽しみ、わしや嬉しい。

伊太八「はて、いつまでいうても尽きぬこと、どうで今宵は過ぎぬ、俺は覚悟をしている」と、

「押し肌脱げば白無垢の、思いつめたる死出立、尾上は悲しき嬉しさ、手早く簾筒押し明けて、ともに着替える晴小袖。

五、義太夫 明烏 六花曙

あけがらす ゆきの あけはの

浦里 山名屋の段

時次郎

明和六年(一七六九)七月三日、伊之助三芳野の心中事件があった。男は浅草蔵前に住む幕府の御用商人伊藤伊左衛門の養子で二十一歳、女は新吉原京町二丁目鳶屋の遊女で二十歳と伝える。二人は前の年からのなじみを重ねた結果、金に

人の重宝、臥竜梅の一軸、紛失したるわが過まり、それゆえに勘当受け忍び／＼に詮議すれども、今において手がかりもなく、浦里にまで憂き苦勞、とても生きてはいられぬ身、せめて縁が顔なりとも、よそながら暇乞い、ああ思い廻せば廻すほど、これまで契りし効もなし、通い廓に咲く花の、色香も深くなれそめし、浦里にまで今は早や、逢う事さえもままたらぬ、浮世の中のありさまか」と、身のなる果ての悔みごと。

「それとも知らず、このう緑、その方に渡した昨日の文、見付けられぬように、持つて行つたもったか」「そりや氣遣いはござんせぬ、時次郎さんに直きに渡しました」「ああこれ声が高い、もそつと静かにいやいのう」あいと縁が心得て、そばをそつと高欄より、堀の外を見下して目早く縁が「あれ申し、時次郎さんが堀の外に来ていさんすわいなあ」と、きくに嬉しさ浦里は、走りかかって高欄に、手をかけながら伸び上り、「このう時様、よう逢いに来て下んした」と、いうに思わず時次郎、振り仰向けど松ヶ枝に、せきくる涙はら／＼と、互いに積る恋の測、心に濡るるばかりなり。(中略)

「折から来かかる足音に、はつと驚き立ち上る、機転きかして禿の緑のべを丸めて堀の外、投げやるしらせに時次郎、様子あらんと用水の、かげに隠れて忍びいる。

「部屋の内明けて髪結のお辰、それと見るより、「おお花魁え、さぞ待ち遠にござんしよう、最前から気がせいで、早う来たいと思つほど、意地の悪い、今日はたくさん仕事もつかえ、またあつちこつちの部屋々々から、呼びに参じてあるけれど、そこ／＼にして抜けて来た、しかし浦里様、お前はきつうすまぬ顔、目もどるみ、どぞ悪うござんかえ、これ縁、ちつと氣を付けて、薬でもあげやいのう」「あい、最前からそう思つていやんすけれど、薬はいやじやと言いやんす」「おお、縁のいやる通り、ちつと気分も悪けれど、薬飲むのもいやになり、櫛入れるのもきつう好かぬほどに、お辰様、今日はよしにしやんしよわいなあ」

「おおそうじやて、そのまあ髪のはらつきよう、ついちよつと櫛入れたら、お前の心のもつれ髪、もつともさつぱりと氣も晴れそうな事じやぞえ」「おお、お辰様の言わんす事わいの、たとえもつれる氣が晴れても、こう結目がゆるんでは、ついばら／＼にならうかと、それが悲しい」「ほほほほ、気にかかる事わいな、さあその気にかかる結目を、しや

んと止めるが私の手の内、まあ鏡台に」とむりやりに、勤められても進みかね、向かう鏡は曇らねど、くもる思いの海山に、しげりて辛き憂き涙、(中略)色目を緑が酌取る目遣い、そらさぬ顔で吸い付くる、煙草の煙空に吹く、お辰もさすが物なれし、世間話をとりませで、

「いや申し浦里様、もう世間の事というものは、その身にあらねば知れぬもの、私も昔を思い出せば、まんざらこうでもなかったが、こういうえはおかしい話するようなれど、どうした事やら常々から、お前の事が気にかかり、いやさ、お前にきいてもらいたいと思つて話、まあちょっときいて下さんせ。あの私がようなみつともない女子でも、たとえにもしも十八とやらで、どないにか思つてくれたが、今の主じやわいな。ほほほほ、もう色々口説かれ、むむまあ聞いたと思わんせ、それから私もはじめて、おおいや、思わす知らず色々事うけさせて、お気の毒やよ、ほほほ、まあ今のがすんだと思わんせ、さあ深うなつて来て、もう何の事はない、指切、髪切というようになると、こりや友達にこうした事で金がある、二歩貸せ、三歩貸せ、さあしもうた、こりや小遣いの錢箱に知られたわいと、思つたれど、さあ、迷つたが因果、ええまよ、若い時は二度とないと、仕面工面して、とうとう小袖簞笥もいつのほど、状の取りやりたくさんに、紙屑が一杯詰まった揚句には、心中に出ようと乗が来たところ、常から仲好い友達が、とめてくれたが幸いとなつて、今では女夫が気易う暮す、もうこうなると栄耀の八百、もうちょっと気に入らぬ事があると、やい出てうせい、暇やるはと、もう憎てらしい、愛想もこそも尽き果てる、千年の恋も覚めると、よういした事じやと、思つても年の功だけじやわいな」

「おお、お辰様とした事が、私らがような勤めの身で、可愛いと思う人もなし、思つてくれるお客もまた、広い世界にないものじやわいなあ」「さあ、そこじやわいな、そうはいうもの、花魁も今が恋盛り、毎夜々々のお客にも、深い可愛い、もう命もやりたいというような主が出来ると、さあ何が親方はせ、逢われはせず、しよう事なしにつきてめて、長い命を短うする事、私が身に覚えがある、ことにまたその中、この縁というような、可愛いらしい子でもあると、無分別は出されぬ出されぬ、義理というもの、可愛いというのも、命あつての事いな、おこれはしたり、つい話に身が入つて、(略)どれ、これから向かい

六、常磐津 仮名手本忠臣蔵

—大序鶴ヶ岡の段—

「忠臣蔵」については、とくにあらためて記すこともあるまい。日本の代表的な舞台作品で、上演回数ももつとも多く、誰にも親しまれている。

そのもととは義太夫で、竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作で、寛延元年(一七四八)八月、大阪竹本座で初演され、その後まもなく歌舞伎に移されて独得の発達をとげた。

今日演奏される「大序、鶴ヶ岡の段」は、その発端にあたる部分で、大切な場面。これは明治初年、常磐津小文字太夫が義太夫から常磐津に直したものと伝えられている。鶴ヶ岡八幡宮の造営が成つたので、足利左兵衛督直義は將軍尊氏の代参として東下し、新田義貞が討死のとき着用していた兜を宝蔵に納めることになる。その鑑定人として、かつて義貞に仕えていた塩谷判官高定の妻顔世御前を召し出だす。顔世御前は、数ある兜の中から蘭奢待の名香をたきしめた竜頭の五枚兜をえらび出し、直義は塩谷、桃井とこれを納めに立つ。残つた高の師直は顔世を呼びとめ、歌の添削に託して艶書をわたして追ふ。

そこへ桃井若狭之助が来合せ、顔世を助ける。師直が怒つて悪口をいうので、若狭之助が憤慨するところまで。

「佳音ありといえども、食せざればその味を知らずとは、国治まつてよき武士の、忠も武勇も隠るるに、たとえは星の昼見えず、へ夜は乱れてあらわるる、ためしをここに仮名書きの、太平の世のまつりごと、頃は暦応元年二月下旬、へ足利將軍尊氏公、新田義貞を討ち亡ぼし、京都に御所を構え、徳風四方にあまねく、万民草の如くに靡きたがう御威勢、国に羽をのす鶴ヶ岡、八幡宮御造営成就し、へ御代参として御舎弟足利

の東屋へ往て参じよう、花魁さらば」といいつつも、降りる梯子を廻り縁、そつと切戸を明けて出る。お辰は二階をふり返り、「これ縁、勝手へ廻るとひまがある、この切戸から向かいへ行くほどに、部屋でなそれしっぽりとしめてたも」と、小かげに忍ぶ時次郎、無理に押しやる切戸口。ぱつたりしめてさあらぬ顔、傘振りかたげ小提灯、さげてお辰は急ぎ行く。人の情に引き入れられ、時次郎は段梯子、疾しや遅しとかけ上り、走り寄つて浦里が、手に手を取つてしめ泣きに、ただ咽び入るばかりなり。

「涙ながらに時次郎、「いつまでくどき歎いても、帰らぬ今のわが身の不運、とても生きてはいらぬこの身、そなたもともといいたいが、二人一緒に死すならば、あとで可愛いやこの縁は、どうなるものぞふびんやな、今死ぬる身をながらえて、わが亡きあとで一片の、回向を頼む浦里」と、きくほどせき来る涙ながら。「そりやあんまりじや情ない、今宵別れて私が身や、可愛い縁は何とならうと思わんす、死なねばならぬ覚悟なら、三途の川もこれこのように、親子手を取り諸共と、なせにいうては下さんせぬ、気強い男とばかりにて、身をふるわして泣きいたる、心ぞ思いやられけり」

「折から遺手の声として「浦里様、ちよつとお目にかかりたい、ちよつと降りて下んせ、早う」とせわしなく、わめきながら段梯子上る足音浦里が、胸にとどろき時次郎を、無理に炬燵へ忍ばすれば、縁は気転ありあわす、夜着打ち着せて立ち退けば、さあらぬていにおお、おかやさんとした事が仰山何の用でござんすえ」「ええ、何の用と白々しい、さあお前にちと用がある、旦那さんが呼んで来いといわんした、縁も一緒に、きり、ござんせ」と引き立てられ、何と答へも浦里が、心を残し炬燵より、胸の動悸のやせなく、禿の縁諸共、呵責の鬼に追い立てられ、しお、立つて行くあとから、あたりを眺むかやが目の、光輝く奥座敷、引き立ててこそ。

左兵衛督直義公、鎌倉に下着なりければ、へ在鎌倉の執事、高の武蔵守師直、御膝元に人を見下す権柄眼、へ御馳走の役人は、桃井播摩守が弟若狭の助安近、へ伯州の城主塩谷判官高定、へ馬場先に幕打ち廻し、威儀を正して相詰める。

へ直義仰せ出ださるるは、いかに師直、へははあ、この唐櫃に入れ置きしは、兄尊氏に亡ぼされし新田義貞、後醍醐天皇より賜わつて着せし兜敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流、着捨ての兜といながら、そのままもうち置かれず、当社の御蔵に納まる条、その心得あるべしとの厳命なり、とのたまへば、へ武蔵守うけたまわり、これは思いもよらざる御事、新田が清和の末なりとて、着せし兜を尊敬せば、御旗下の大小名、清和源氏はいくらもあり、奉納の義しかるべからず候と、遠慮なく言上す。

へいや左様にては候まじ、この若狭の助が存ずるは、これはまったく尊氏公の御計略、新田の徒党の討ち洩らされ、御仁徳を感心し、攻めずして降参さす御でだてと存じ奉れば、無用の御評議卒爾なり。へと、いませも果てず、やあ師直に向かつて卒爾とは出過ぎたり、義貞討死したる時は、大わらわ、死骸のそばに落ち散つたる兜の数は四十七、どれがどうとも見知らぬ兜、そうであろうと思つたのを、奉納したその後で、そでない時や大きな恥、なま若輩ななりをして、お尋ねもなき評議、すつこんでおいやれと、御前よきまま出るままに、杭とは思わぬ言葉の大槌から、桃井殿の申さるるも治まる代の軍法、これもつてすてられず、双方全き直義公の御賢慮、仰ぎ奉ると申し上ぐれば、へ御機嫌あり、へはほ、さいわんと思ひし故、所存あつて塩谷が婦妻を召し連れよといつけし、これへ招けとありければ、へはつと答への程もなく、へ馬場の白砂素足にて、裾で庭掃くうかけは、神の御前の玉簪、玉もあざむく薄化粧、塩谷が妻の顔世御前、はるか下つて畏こまる。

へ女好きの師直、そのまますか、塩谷殿の御内室顔世殿、さいぜんよりさぞ待ち遠、御大儀々々、御前のお召し、近うと取り持ち顔。へ直義御覧じ、召し出すこと外ならず、いんじ元弘の乱れに、後醍醐帝都にて、召されし兜を義貞に賜わつたれば、最後の時に着つらんこと疑いはなれども、その兜を誰あつて、見知る人ほかになし、その頃は塩谷が妻、十二の内侍のそのうちにて、兵庫の司の女官なりときき及ぶ。

さぞ見知りあらんず、覚えあらば兜の本阿弥、へめきき目利きと女子には、敵命さえもやわらかに、へお受け申すもまたなよやか、冥加にあまの君の仰せ、それこそは私が、明け暮れ手馴れし御着の兜、義貞殿拝領にて、蘭奢待という名香を添えて賜わる。お取り次ぎはすなわち顔世。その時の勅答には、人は一代名は末代、すは討死せん時、この蘭奢待を思うま、内兜に炷きしめ着るならば、鬢の髪に香りをとめて、名香かおる首取りしという者あらば、義貞が最後と思し召されよとの言葉は、よもや違うまじ。へ申し上げたる口もとに、へ下心ある師直は、小鼻いからし聞きいたる。

へ直義くわしくこしめし、おつまびらかなる顔世が返答、さあらんと思し故、落ち散つたる兜四十七、この唐櫃に入れ置きたり。見分けさせよと御上意の下侍、かがむる腰の海老錠を、あける間おそしと取り出すを、へおめず聴せず立ちよつて、見れば所も名にし負う、鎌倉山の星兜、とつぱい頭、獅子頭、さて指物は家々の、流儀々々によるぞかし、あるいは直平、筋兜、綴のなきは弓のため、その主々の好みとて、数々多きその中にも、五枚兜の龍頭、これぞといわぬそのうちに、はつと薫りし名香は、顔世がなれし義貞の、兜にて御座候と差し出だせば、へさようならめと一決し、塩谷桃井兩人は、宝蔵に納むべし、こなたへ来れと御座を立ち、顔世にお暇賜わりて、段がつら過ぎ給えば、へ塩谷桃井兩人も、うちつれてこそ入りける。

へあとに顔世はつき徳なく、へ師直様には今しばし御苦労ながら、御役目をお仕舞いあつてお静かに、お暇の出たこの顔世、長居はおそれおさばと、立ち上る。へ袖すりよつてじつと控え、これまあお待ち待ち給え、今日の御用しまい次第、そのもとへ推参して、お目にかける物がある。幸いのよい所、召し出だされた直義公は、わがための結ぶの神、御存知の如くわれら歌道に心をよせ、吉田の兼好を師範と頼み、日々通、そのもとへ届けくれよと問ひ合せのこの書状、いかにもとの御返事は、御口上でも苦しゅうないと、袂から袂へ入る結び文、顔に似合おぬ様参る、武蔵鎧と書いたるを、へ見るよりはつと思えども、はしたのう恥しめては、かえつて夫の名の出る事、もち帰つて夫に見しようか、いや、いわず投げ返す。へ人に見せじと手に取りあげ、戻すさえ手にふれたりと思つにぞ、わが文ながら捨てもおかれず、くどうはいわぬ、よい返事きくまでは、くど

は一中節の「尾上の雲賤機帯」をもとにしており、ところどころにその味を残しているのも特色の一つにあげられる。花盛りの隅田川の渡し場に、都からわが子の行方をたずねて、狂女が通りかかる。その子は人さらいにさらわれて、行方不明になったので、母親は子供恋しさの一念で狂乱状態にある。それを見た渡し守は、からかうのによい相手と、面白半分に、その持つている掬い網で、散り浮く花をすくい集めたら、その子の行方を教えてやろうという。狂女はそれをまにうけて、一生懸命に花をすくうので、渡し守は気の毒になり、本当に慰めてやろうとするが、狂女は羯鼓の踊りを踊りながら狂つて行くという筋。花やかな隅田川に、狂女と船頭のやりとりという単純な場面だが、全体に華やかさと明るさがあり、そしてその中に狂女の哀愁の気分をうまく表現しなければならぬ。よく流

行している。

へ名にし吾妻の角田川、その武蔵野と下総の、眺め隔てぬ春の色、桜に浮かぶ富士の雪、柳に沈む筑波山、紫匂う八重霞、錦をここに都鳥、古跡の渡りなるらん。へ春も来る、空も霞の滝の糸、乱れて名を流すらん。へ笹の小笹の風いと、花と愛でたるうない子が、人商人にさそわれて、行方いずくと白木綿の、神に祈りの道たずね、浮きてたどよう岸根の舟の、これがこがれていざ言問わん、我が思ひ子の、ありやなしやと狂乱の、正体なきこそあやなけれ。へ船人これを見るよりも、好いなくさみと戯れの、気がいよ、気がいよと、手を打ちたたき囃すにぞ、へ狂女はきいて振り返り、ああ気がいよと曲もなや、物に狂うは我ばかりかは、鐘に桜の物狂い、風に波の物狂い、菜種に蝶の物狂い、三つの模様を縫いにして、いとし我が子に着せばやな、子を綾瀬川名にも似ず、心関屋の里ばなれ、縁の橋場の土手伝い、行きつ戻りつこかしこ、尋ぬる我が子はいずくぞや、教えてたべと夕汐に、へ船長なおも拍子にかかり、へそれその持つたるすくい網に、面白う花をすくいなば、恋しと思つその人の、ありかを教え参

いて口説いて、くどきぬく、天下を立てうと伏しようとも、ままた師直、塩谷を生きようと殺そうとも、顔世の心たつた一つ、何とそうではあるまいかと、へきくに顔世が返答も、涙ぐみたるばかりなり。へおりから来合す若狭の助、例の非道と見て取る気転、顔世殿まだ退出なされぬか、お暇出でてひまどらば、かえつて上への恐れ、はやお帰りと追い立つれば、へきやつさては気取りしと、弱味をくわぬ高の師直、やあまたしてもいわれぬ出過ぎ、立つてよければ身が立たず、このたびのお役目首尾よう勤めさせくれよと、塩谷が内證顔世の頼み、こりやそうなくてかなわぬはず、大名でさえあの通り、小身者に捨て知行、誰がかげで取らす、師直が口一つで、御器さきようも知れぬ危ない身代、つ若狭の助、刀の鯉口砕くるほど、握りつめは詰めたれども、神前なり御前なりと、一旦の堪忍も、今一言が生き死にのことはの先手、へ還御ぞとお先を払う声々に、へせんかたなくも期をのばす、無念は胸に忘れず、へ悪事さかつて運強く、切られぬ高の師直を、へあすの我が身の敵とも、へ知らぬ塩谷があとおさえ、へ直義公はゆう／＼と、歩御なり給う御威勢、人の兜の龍頭、御蔵に入れる数々も、四十七字のいろはわけ、仮名の兜を和らげて、兜頭巾のほころびぬ、国の掟ぞ久方の。

七、長唄 八重霞賤機帯（賤機帯）

文政十一年（一八二八）六月、山王日枝神社の祭礼のとき、その踊り地として作られた。四代目杵屋三郎助（十代目六左衛門）の作曲で、前弾と置唄は、その後で作られた。なお劇場の舞台にかけられたのは、明治二十五年七月の鳥越座が最初である。能の「隅田川」に「桜川」を加えたような筋だが、直接に

らせん。へなに、面白う花をすくえとか、いで／＼花をすくわん。へあら心なの川風やな、人の思いも白浪に、散り浮く花をすくい集めん、心して吹け川風、沖のかもめの、ちりやちりちり、むらむらばつと、ばつと乱る黒髪も、取りあげて結う人もなし。へ船長今は気の毒さ、何がなしおにと立ちあがり、二上りへそもさても和御寮は、誰の子なれば、何程の子なれば、尋ねさまようその姿、見る目も憂しと諫むれば、へ音頭おんどと戯れの、鼓の調べ引きしめて、羯鼓を打って見しようよ。へ面白の春の景色や、筆にもいかに尽くさん、霞の間には樺桜、雲と見えしは三吉野の、吉野の川の滝津瀬や、へ風に乱る糸桜、いとし可愛の児桜、したい重ねし八重桜、一重桜の花の宴、いとしらし。へ千里も薫る梅若や、へ恵みを仰ぐ神風は、今日ぞ日吉の祭御神楽、君が代を、久しかれとぞ祝う氏人。

第二部

一、箏曲冬の曲ふゆのきょく

幕末の安政(一八五四—五九)ごろ名古屋の箏曲家吉沢校の作曲。古今組の一つ。古今組とは、千鳥の曲、春の曲、夏の曲、秋の曲、冬の曲の五曲をいう。これらの曲は、箏曲の古い形式——組唄時代のような純粹な箏曲をめぐり作られたもので、歌詞は、千鳥の曲の後唄を除いて、すべて「古今和歌集」からとって組み合せている。

曲は唄も箏も単純・素朴さを目的とし、箏の調絃も古今調子を用いて、箏の高雅さをねらっている。古今組の曲には現在箏だけの長い合の手——手事があるが、千鳥の曲以外の手事は、のちに明治になって、京都の松阪春栄という人が作曲して入れたもので、派手な旋律で技巧の勝ったものになっている。

この冬の曲も、歌は「古今和歌集」の冬の部からとったもので、第一歌は説人知らず、第二歌は紀秋岑、第三歌は壬生忠岑、第四歌は春道列樹の歌、そして前弾は雅楽にヒントを得たものといわれている。

〔前弾〕

- 一、竜田川錦織りかく神無月、時雨の雨を経緯にして(合)
 - 二、白雪の所もわかず降りしけば、巖にも咲く花とこそ見れ(合)
 - 三、みよし野の山の白雪踏みわけて、入りにし人のおとづれもせぬ(合)
- 〔手事〕
- 四、昨日といひ今日と暮らして飛鳥川、流れて早き月日なりけり。

るしてたべ、二つにはまた初菊殿、また祝言の盃を、せぬが互いの身の仕合せ、わしが事は思い切り、他家へ縁付して下され、討死と聞くならば、さこそ歎かん不憫や」と、孝と恋との思いの海、隔つ一間に初菊が立聞き涙まろび出で、わつとばかり泣き出せば、はつと驚き口に手をあて、(中略)

へアアコレなたも武士の娘じゃないか、十次郎が討死はかねての覚悟、ばば様に泣顔見せ、もし悟られたら、未来永々縁さるぞや」「エエ」。「サア、とこいう内時刻が延びる、その鐘櫃ここへこへこへ」「アイアイ」「さ早う、時延びるほど不覚のもと、ききわけない」と叱られて、いとしい夫が討死の、かどでの物の具つけるのが、どう急がる物ぞいのと、泣く泣く取出す緋緞の、鎧の袖にふりかかる、雨か涙の母親は、白木に土器白髪のはば、長柄の銚子蝶花形、首途を祝う熨斗昆布、結ぶは親と小手脚当、六具かたむる三三九度合この世の縁や割小礼、猪首に着なす鞞形の、あたりまばゆき出立は、さわやかなりしその骨柄(中略)哀れをここに吹き送る、風が持ってくる攻め太鼓、氣をとり直しつづ立上り、「いづれも、さらば」といい捨てて、思い切つたる鎧の袖、行方知らずなりにけり。

「のう悲しや」と泣き入る初菊、母も操も顔見合わせ「ばばさま」「嫁女可愛いや、あつたら武士を、むざむざ殺しにやりました、のう初菊、十次郎が討死の出陣とは知りながら、なまなか止めて主殺しの憂き死恥をさらそうより、健気な討死させんため、祝言によそえて盃をさしたのには、暇乞いやら二つには、心残りのないようと、思いあまつた三三九度、ばばが心のせつなさを、推量しや」とばかりにて、初めて明かす老母の節義。聞く初菊も母親も、一度にどうと伏し転び、前後不覚に泣き叫ぶ。へ襖押し明け何気のう、つかつか出する以前の旅僧。「これこれかみさま、風呂の湯が沸きました、どなたぞお入りなされませ」と、いうにこなたは泣き顔かくし、「おおそれは御苦勞、さりながら、年寄に新湯は毒、あとは若い女子ども、まあお先へ御出家から」「いかさま湯の辞儀は水とやら、さようならば御遠慮なし、お先へ参る」と立ち上げれば、三人は涙押し包み、奥の仏間と湯殿口、入るや、

へ月漏る片底、ここに苧取る真柴垣、夕顔棚のこなたより、現われ出たる武智光秀。「必定久吉この内に、忍びいるこそくつきよう一、只一討

二、義太夫尼ヶ崎の段あまのさき

絵本太功記十段目

「絵本太功記」は、近松柳・近松湖水軒・近松千葉軒の合作で、寛政十一年(一七九九)七月豊竹座初演。「真書太閤記」・岡田玉山の読本「絵本太閤記」などで知られた秀吉の一代記から、信長と光秀の反逆、秀吉の高松城攻撃などを、一日一冊に日を追って十三冊(段)にした。したがって、段目もそれぞれ一日の段、二日の段という名がつけられている。

この中では十日の段(十段目)が、俗に太十(たいじゅう)といわれ、文楽でも歌舞伎でも、もともともよく上演される。それは、内容的にも変化があり、また、歌舞伎でいうと、光秀を座頭(ざがしら)・妻の操を立女方、十次郎を花形役者、初菊を若女方、皐月を老女方というように、一座の俳優の役割りに都合が良かったためもある。

光秀の母皐月のかくれ家に、光秀の子十次郎が出陣の願ひに来て、初菊と祝言して出かけて行く。旅の僧となってこの家へ入り込んだ久吉を討とうと、光秀が一間の内へ竹槍を突き入れると、皐月が身替りに刺され、光秀をいさめる。十次郎は傷をうけて帰り、味方の敗戦を知らせて死ぬ。あらわれた久吉は光秀に、天王山で勝負を決しようといつて別れて行くまで、

今日は時間の都合で、一部分をカットして演奏します。

へ押しとどめ、「母様にもばば様にも、これ今生の暇乞い、この身の願ひ叶うたれば、思いおく事さらになし、十八年がその間御恩は海山かえ難し、討死するは武士の、習いと申し召し分けられて、先立つ不孝はゆ

と氣は張弓、心は矢竹藪垣の、見越の竹をひっそぎ鎗、小田の蛙の啼音をば、とどめて敵に悟られじと、合差足拔足、窺いより、聞ゆる物音心得たりと、突込む手練の槍先に、わつとたまざる女の泣声、合点ゆかずと引出す手負、真柴にあらで真実の、母のさつきが七転八倒、「ヤアこは母人か、しなしたり、残念至極」とばかりにて、さすがの武智も仰天し、只茫然たるばかりなり、声聞付けてかけ出る操、初菊諸共はしり出で、「ノウウ母様か情けない、この有様は何事」と、すがり歎けば目をみひらき、「歎くまい、歎くまい、内大臣春長という、主君を害せし武智が人類、かくなりはつるは理の当然、(中略)おのれが心只一つで、しるしは目前これを見よ、武士の命を断つ、刃も多いにこのような、ひっそぎ竹の猪突槍、主を殺した天罰の、報いは親にもこの通り」と、槍の穂先に手をかけて、えぐり苦しむ氣丈の手負、

へ妻は涙にむせ返り、「これ見給え光秀殿、軍の首途にくれぐれも、お諫め申したその時に、思い留って給わらば、こうした歎きはあるまいに、知らぬ事とはいいいながら、現在母御を手にかけて、殺すというはエエママ何事ぞいのう、せめて母御の御最後に、善心に立かえると、たつた一言聞かしてたべ、拝むわいの」と手を合わし、諫めつ泣い一つ筋に、夫を思う恨み泣き、操の鏡曇りなき涙に誠あらわせり。

三、新内若木仇名草わかきのあだなぐさ

新内節の代表曲。初世鶴賀若狭掾の作曲で、新内節といえはこの中のクドキへ縁でこそあれ末かけて……が、その代名詞になるほどよく知られている。

市川屋蘭蝶という浮世声色身振師は、柳屋の此糸となじみを重ね、女房のお官が身を売った金まで入れあげてしまふ。お官は客となって此糸に逢い、蘭蝶との夫婦のなりたちを語

り、蘭蝶と縁を切ってくれ、別れてくれと頼む。此糸はお宮の真実をうたれ、縁を切ることを約束する。その様子を隣の部屋で聞いていた蘭蝶は、此糸の本心は死ぬ覚悟であろうと察し、結局、お宮の願いも空しく、二人は心中してしまふ。全曲を演奏すると一時間以上かかる大曲なので、その中でもっともよく知られているお宮のクドキ「縁でこそあれ……」を中心にその前半を演奏する。

蘭蝶「さぞお寂しゅうござんしたろう」
お宮「ああ、お前には、お客が来たそうだが、蘭蝶というお人かえ」
此糸「あい、いえいえ」
お宮「そりや誰さんでもかまわぬが、これ此糸さん、お前はなあ、お顔に似合わぬ、恐ろしい、恨めしいお人じやなあ。こういうたら、あの女子は気がいか、とつけもないことと思わんしょうが、わたしは、こなさんのお深間、蘭蝶殿の女房、宮でござんすわいな」
此糸「ええ、あの、お前が」
お宮「さあさあ、さぞびつくりさんしたろうが、わたしが今日来たのは、さだめし逢うて存分いふかと思わんしょうが、そこをずつと取つて退けて、折り返して相談、とつくりと聞いて下さんせや、おおかた主の語で、何もかも聞かんと、知りぬいていさんしょうが」
「いわねばいとど、せきかかる、胸の涙の、やる方なき」
お宮「あの蘭蝶殿との夫婦のなりたち、話せば長い高輪で、一つ内に互いに出居衆」

蘭蝶「さぞお寂しゅうござんしたろう」
お宮「ああ、お前には、お客が来たそうだが、蘭蝶というお人かえ」
此糸「あい、いえいえ」
お宮「そりや誰さんでもかまわぬが、これ此糸さん、お前はなあ、お顔に似合わぬ、恐ろしい、恨めしいお人じやなあ。こういうたら、あの女子は気がいか、とつけもないことと思わんしょうが、わたしは、こなさんのお深間、蘭蝶殿の女房、宮でござんすわいな」
此糸「ええ、あの、お前が」
お宮「さあさあ、さぞびつくりさんしたろうが、わたしが今日来たのは、さだめし逢うて存分いふかと思わんしょうが、そこをずつと取つて退けて、折り返して相談、とつくりと聞いて下さんせや、おおかた主の語で、何もかも聞かんと、知りぬいていさんしょうが」
「いわねばいとど、せきかかる、胸の涙の、やる方なき」
お宮「あの蘭蝶殿との夫婦のなりたち、話せば長い高輪で、一つ内に互いに出居衆」

蘭蝶「さぞお寂しゅうござんしたろう」
お宮「ああ、お前には、お客が来たそうだが、蘭蝶というお人かえ」
此糸「あい、いえいえ」
お宮「そりや誰さんでもかまわぬが、これ此糸さん、お前はなあ、お顔に似合わぬ、恐ろしい、恨めしいお人じやなあ。こういうたら、あの女子は気がいか、とつけもないことと思わんしょうが、わたしは、こなさんのお深間、蘭蝶殿の女房、宮でござんすわいな」
此糸「ええ、あの、お前が」
お宮「さあさあ、さぞびつくりさんしたろうが、わたしが今日来たのは、さだめし逢うて存分いふかと思わんしょうが、そこをずつと取つて退けて、折り返して相談、とつくりと聞いて下さんせや、おおかた主の語で、何もかも聞かんと、知りぬいていさんしょうが」
「いわねばいとど、せきかかる、胸の涙の、やる方なき」
お宮「あの蘭蝶殿との夫婦のなりたち、話せば長い高輪で、一つ内に互いに出居衆」

四、常磐津 神路 山色 瑋 (油屋縁切)

かみじやまうきなのこいぐち

安政二年(一八五五)五月、江戸の中村座と市村座で、二番目狂言として同時に「伊勢音頭恋寝刃」が上演されることになった。市村座では従来の竹本の浄るりでは面白くないといふので、目先をかえて、常磐津節に直して上演したところ、坂東彦三郎の福岡貢、尾上菊次郎のお紺、中村鶴蔵の万野といふ配役とも相まって非常な好評を博した。もちろん、瀬川如翠が修正改作し、当時の名人といわれた常磐津豊後大掾と岸沢古式部が力を合せて節をつけたものである。

今回演奏する場面は、貢とお紺とが、凶らず阿波の大尽の酒席で落ち合ったところからはじまる。お紺は、万座の手前わざとお鹿との間を疑い、心にもない愛想つかしをいって、貢をののしる。その本心を知らない貢は、烈火のように怒り、殺してやろうと立去るところまで。

蘭蝶「さういえばそんなものじやが、ちよつと奥の客が粹な奴で、そなたの気も変ろうと、こりや真の事、受け取つて」
此糸「お前もまあ、それほど気遣いなら、ちよつと覗いて見さんせ。あれ、あちらを向いてる女中さん、わたしやあそこへ行くほどに、とつくりと見さんせ」と、
「暖簾押しあげ此糸は、
此糸「おお、さぞお寂しゅうござんしたろう」
お宮「あい、お前には、お客が来たそうだが、蘭蝶というお人かえ」
此糸「あい、いえいえ」
お宮「そりや誰さんでもかまわぬが、これ此糸さん、お前はなあ、お顔に似合わぬ、恐ろしい、恨めしいお人じやなあ。こういうたら、あの女子は気がいか、とつけもないことと思わんしょうが、わたしは、こなさんのお深間、蘭蝶殿の女房、宮でござんすわいな」
此糸「ええ、あの、お前が」
お宮「さあさあ、さぞびつくりさんしたろうが、わたしが今日来たのは、さだめし逢うて存分いふかと思わんしょうが、そこをずつと取つて退けて、折り返して相談、とつくりと聞いて下さんせや、おおかた主の語で、何もかも聞かんと、知りぬいていさんしょうが」
「いわねばいとど、せきかかる、胸の涙の、やる方なき」
お宮「あの蘭蝶殿との夫婦のなりたち、話せば長い高輪で、一つ内に互いに出居衆」

蘭蝶「さういえばそんなものじやが、ちよつと奥の客が粹な奴で、そなたの気も変ろうと、こりや真の事、受け取つて」
此糸「お前もまあ、それほど気遣いなら、ちよつと覗いて見さんせ。あれ、あちらを向いてる女中さん、わたしやあそこへ行くほどに、とつくりと見さんせ」と、
「暖簾押しあげ此糸は、
此糸「おお、さぞお寂しゅうござんしたろう」
お宮「あい、お前には、お客が来たそうだが、蘭蝶というお人かえ」
此糸「あい、いえいえ」
お宮「そりや誰さんでもかまわぬが、これ此糸さん、お前はなあ、お顔に似合わぬ、恐ろしい、恨めしいお人じやなあ。こういうたら、あの女子は気がいか、とつけもないことと思わんしょうが、わたしは、こなさんのお深間、蘭蝶殿の女房、宮でござんすわいな」
此糸「ええ、あの、お前が」
お宮「さあさあ、さぞびつくりさんしたろうが、わたしが今日来たのは、さだめし逢うて存分いふかと思わんしょうが、そこをずつと取つて退けて、折り返して相談、とつくりと聞いて下さんせや、おおかた主の語で、何もかも聞かんと、知りぬいていさんしょうが」
「いわねばいとど、せきかかる、胸の涙の、やる方なき」
お宮「あの蘭蝶殿との夫婦のなりたち、話せば長い高輪で、一つ内に互いに出居衆」

いと、膝にもたれる酒の科。徳島はぐにやぐと。猫にまたたび振りかけた。へようまあ得心してくれたな。いや併し大分酒に酔うた様子、醒めての上のご分別、手打つて替わろう手管か知れぬ。こりや嘘らしいと裏問えば、奥より万野立出でて、何の嘘いうてよいものか。証拠人は北六万野、用意がよくばはこれへの、こことばに仲居末社ども、へ千しん万くんの思いを晴らせ奉る、へサア御祝言目出たいと、雌蝶雄蝶に盃を、今宵ぞするめよる昆布、へサア、申しお紺さん、岩治さんと固めの盃、色直しは直ぐに床入り、へ媒人役は北六様、へ嫁君から飲んで花聲へさし給え。へ万野が立って盃を、お紺にサアと差しつけるを、へ立てし起請の手前さえ、取り上げ兼るを心に詫び、思い切つて手に持てば、万野がなみくつぐ酒に、窺う貢が走せ寄つて、お紺が盃引つたり、へイヤお紺、おのれこの盃しちや済むまいがやと、落花微塵になげうたり。
へあわやと満座も見合す顔、お紺はにっこり、へホ、誰かと思えば貢さん、お客と盃するが、マ、なぜに済まぬえ。へオオト通りの盃なら格別、その客と一生の固め祝言のと、改まったこの場の盃、それ故さすことならぬ、と詰め寄つて、へコリヤお紺、我身それじや済むまいがな。これまで長の年月を、言いかわしたと頼んだこと忘れしものか、おのれはなア、もう料簡がと立ちかかると、へ岩治が引き退け尖り声、へヤイ、身が揚詰の女郎へ対し、無礼な奴、うぬどうしてくれんと立ちかかると、へアアコレ、マアマア待つてと万野が押し止め、へこれいなア貢さん、お前はマアこちの内へ、誰が許してござんしたえ。へヤア誰がとは最前おぬしに。へエエモ、じやらと何をいうてじやいな。わしや知らぬぞえ。お前の様な油虫客は、顔を見るも胸が悪い、ハイ、縁起が悪い。ちやつとお帰り。これいなア貢さん、去んで貰いましよと、いえば猶更ぐつと急ぎ立ち、へコレ万野、マア味なこといとおるな。この貢がいつ女郎の油吸うたことがある。サ、それ聞こう。
へオホ、アノマア白々しい顔わいな。ヤコレお紺さん。最前の文出して見せてやらんせと、いうにお紺が顔背け、投げ出す文をそのまま取つて読み取る文言。へム、コリヤコレおれが名を騙り、女郎のお鹿へ無心の状。へ何と覚があらうかの。へイヤ知らぬ。コリヤ偽筆。コレ

コレ、よう物をつもつて見やいの。あた薄汚いアノお鹿、なりとい顔
といい、悉皆猿芝居のお染のような、あきれてものがいわれぬと、い
を聞きつけ走せ出るお鹿、貫が前へどつかりと、大白なり、へ申し貫さ
ん。さつきにからこの満座の中で、私の悪口よういうて下さんした。そ
れ程厭なら何故この中から、万野を頼んで、コレコレこの様な度々の無
心状、へ金より大事な貫さん、へ初めはわづか二分三分、へ貸して上げ
たもこなさんに、惚れた私の心から、變登りにのぼりつめ、コレ、こ
に三両、かしこに五兩、その度毎に身の廻り、並大抵の事かいなア。梅
が枝もどきでいるものを、みんな狸の嘘の皮、へお猿芝居のお染とは、
へあんまりつれない、エエ私しや立たぬ。コレ立ててたべ。のほよほ
ほよほさん又立うかいな。と武者振りつくを突きのめし。

へエエ、まざまざしいその嘘言、身不肖なれども福岡貫、女郎を欺して
金取ろうか。エエ馬鹿なことをと睨みつけ、へコレお紺、このお鹿を呼
んだのは、この間から頼み置く、ナソレ、あの事でそなたに一寸逢いた
さに、待ち合わせる中、酒の相手に、誰なと呼ばばにや座敷に置かぬと、
万野がいう故誰なりと、いえば図らずこのお鹿、拵え文の様子といい、
コリヤ深い仔細が無けりやかなわぬ。訊はどうじゃと詰め寄れば、お紺
はじろりと打見やり、へオホ、へ、お前からおこさんした内証の文が私
の手に入り、腹が立つのも尤もござんす。コレ申し貫さん、
へ今更いうも愚痴ながら、広い伊勢路のこの廓で、今日の今迄浮名立つ、
二人が深い恋仲に、へこうした訳で金が要ると、明していうて下さんし
たら、何ばかりいしない私でも、三十や五十の金、万更いやともいうま
いに、その私を差し置いて、さもしい僅なアノ金に、こんな多くの人中
で、恥かかしようと思す、知れた。へエエ。へイイエナア、へ拵え事
じやどうこうと、ほんのこの座のてれかくし、見下げ果てた貫さん、恋
も色もさめ果てた。それじやよって私しやモウ、ふつとりと思いい切り、
岩治さんに靡く心でござんす。マア、そう思うて下さんせと、剣もほろ
ろにいい放す。

五、宮園鳥辺山

宮園節は、もと上方に生れ、幕末ごろから江戸に定着した
浄瑠璃。江戸では、むしろ園八節といういい方で知られてお
り、独特な三味線の音色と、哀切な語り口は、永井荷風の小
説「雨瀟々」にも描かれている。

京都市郊外、東山の中腹付近の鳥辺山または鳥辺野とい
うあたりは、男女の心中道行にふさわしい場所として有名だっ
た。

それでこの鳥辺山を舞台にした事件は、古くはおまん源五
兵衛、お染半九郎などで知られていたが、明和四年（一七六
七）ごろ、宮園節に作曲され、集大成された。

この曲は、宮園節の代表曲で、幽玄な中にも妖しいばかり
のなまめかしさを漂わせている。

なお、お芝居でよく上演される「鳥辺山心中」は、大正四
年に岡本綺堂がこれらの実説やいつたえをもとに創作した
ものである。

へ一人来て、二人連れ立つ極楽の、清水寺の鐘の聲、はや初夜もすぎ、
四つも告げ、九つ心も、恋路の闇にくれば鳥、あやなき空や、浮橋に、
つながら縁や縫之助、つい仇惚れも誠となりて、ほんの女夫になりたい
と思ふ思ひはまなならぬ、今はこの身に愛想もこそ、

二上りへ尽きた浮世や、いざ鳥辺野の、女肌には白無垢や、上に紫藤の
紋、中着緋紗綾に黒繻子の帯、年は十七初花の、雨にこがるる立ち姿、
男も肌は白小袖にて、黒き輪子に色浅黄裏、二十一期の色盛りをば、恋
という字に身を捨小舟、どこへ取りつく、鳥ととも無し。

本調子へきく度々につかりし、父母の事思ひ出し、あとの嘆きを思ひ
やり、ここから去んで呉竹の伏し沈みたる袖の露、へ浮橋涙もろともに、

惜しい。己れは根性が腐ったか。イヤサアノ根性が。へサ、その根
性が腐りました。アアノ氣も違った。氣も違わいでこんなこと、サ、そ
の私への未練を残さずに、きりきり去んで下さんせと、へ口と心の裏表、
色にも出されぬこの場の仕儀、血を吐く思いぞ切なけれ。

へ知らぬ貫は腹立ち涙、拳を握る男泣。へそばから北六高笑い、へアハ
、ア、色々と珍らしいことを聞くものだ。へ客が女郎を欺して取
るとは、へ世にも珍らしい新板だわえ。へこれが真の伊勢乞食だ。へ御
導者々々。徳島旦那はお大尽、かす称宜貫は油虫、サッサット掃アき出
せ。へ何だ、へ、へ、何んで睨みさらすのじや。エエいけりう乞食の
生盗人め。といえ岩治もせせら笑い、へムム聞けは聞く程たわけの限
り、お紺が心底聞く上は、今夜中に身請して己が女房、ドレ金の威光を
見せてくれようと、へお紺が膝を飯枕、脛ふん伸ばして、ムム、傍若無
人、貫は歯噛み足指りして、へチエエ、アノさまは。見下げ果てた蓄生
め。とはいえおのれに限って、この様な根性とは知らなんだわえ。

へお紺が胸はお百倍、張り裂くばかりせくるしき。涙粉らす煙草さえ、
へおのれの蔭に立聴く喜介、刀を持って走り出で、へ貫様、モウお帰
りなされませうか。お預り申したお腰の物と、差出す刀引たくり、腰にさす
間も氣は転倒、刀の遠い氣も付かず。へ万野は傍へ立ち寄って、へこれ
ナア貫さん、もうおしやべり仕舞かえ。もつと何ぞいわんせんか。何ば
やき、思わんしても、銭の切れ目が縁の切れ目じや。お紺さんを恨み
なさることは微塵もない。お前の素寒貧を恨まんせ。ほんにほんに、お
前の様な貧乏神は、片時置くも内の不吉、とつとと去んで下さんせと、
突き出す門口堪え兼ねて、刀の柄へ手をかくるを、へアコレと、喜介は
止める氣扱い。へ貫も大事を抱えし身。へお紺が見返り、へコレ貫さん
モウ是きり逢わぬぞえ。へ勝手にしをれと閉て切る門の戸、へ無念涙に
心も空、へお紺覚えていいよ。へ道を蹴立てて走せ返る。へ後は座敷も
浮き立ちで、へサア、へ油虫客の幕が切れたわいな。嬉しや。へこ
れから後の色直しは、お床入の玉子酒、へさあござんせと打連れてこそ
へ入りにける。

父さんや母さんのあるはお前も同じ事、その親々に苦をかける。不孝者
には誰がした。合惚れという仲人や、枕の咎じやないかいな、恋は心の
外とやら、夕べも内の花車さんが、わしに意見を真実の、色という字が
あればこそ、好かぬ勤めの辛抱も、好いた殿御へ心意氣、いとし可愛が
定ならば、五度逢うものを三度逢い、二度を一度の逢瀬には、親おやか
たの機嫌もよく、色で身をうつこともなく、世間に多い心中も、金と不
孝で名を流す、色で死ぬるは無いぞとよ。恋は思ひのはじめにて、盛り
が憎い迎い駕籠。そのきぬぎぬや朝顔の、夕顔にまでわけへだて、辛気
な苦界まなならぬ、悲しいことや辛いこと、生きる死ぬるの手詰にも、
必ずかならず若氣を出し、短気な心持ちやんなやと、重ね井筒の上越し
た、粹な意見も上の空、お前に迷う心から、面白い氣で聞いていた、親
御様へも世の義理も、わしから起るこのしだら、堪忍してとばかりにて、
すがり付いて泣きいたる。

二上りへ思い切らしゃられ、もう泣かしやんな、わしは泣かねどソレこ
なさんの、いいやそなたの、いやそなたのと、顔と顔を見合せて、一
度にわつと嘆くにぞ、一足ずつに消えて行く、終にこの野の春降る雪や、
折からにはや寺々の鐘も撞きやみ、夜はしらじらと、鳥辺山にぞ着きに
ける。

六、清元 能色相図 (神田祭)

しめろやれいろの かけ こそ

三升屋三三治作詞、二世清元齋兵衛作曲。天保十年（一八
三九）九月、江戸河原崎座で二世清元延寿太夫の養子二世栄
寿太夫のお目見得浄るりとして初演された。

神田明神の祭礼は、江戸時代のはじめ將軍の上覧に供して
から、山王祭とともに、御用祭、天下祭と呼ばれて有名であ

った。毎年大祭を行っていたが、天和ごろから山王祭と交互に行うようになり、大祭のない年は陰祭といった。江戸時代は九月十五日だったが、明治以後五月十五日に変更された。歌詞は支離滅裂だが、いかにも神田の祭礼気分をしのばせる粋な味と、景気のいい節がついているので流行している。

「一歳を、今日ぞ祭りに当り年、警護てこまへ花やかに、飾る棧敷の毛氈も、色に出にけり酒機嫌、神田囃子も勢いよく、来ても見よかし花の江戸、祭に對の派手模様、牡丹、銀菊、裏菊の、由縁もちようど花尽し、祭のナア、派手な若い衆が勇みにいさみ、身姿を揃えてヤレ囃せ、ソレ囃せ、花山車てこまへ、警護に行列ヨンヤサ、男達じやのヤレコラサ、達引じやのと、いうちや私に困らせる、へ色の欲ならこつちでも、へ常から主の仇な気を、知っていながら女房に、なつてみたいの欲が出て、へ神や仏を頼まずに、義理も糸瓜の皮羽織、親分さんのお世話にて、わたりをつけてこれからは、世間かまわず人さんの、前はばからず引き寄せて、楽しむうちにまたほかへ、それから闇と口癖に、へ森の小鳥われはまた、尾羽をからすの羽根さへも、なぞとあいつが得手物の、ここが木遣の家の株。

「ヤアやんれ引け引けよい声かけて、エンヤラサ、やつと抱き締め、床の中から、小夜着布団をなぐりかけ、何でもこつちを向かしやんせ、よいよいよんやな、よい中同士の、小さいかいなら、痴話と口舌は、何でもかんでも今夜もせえ、へ東雲の明けの鐘ごと鳴るので仲直りすました、よいよいよんやな、そよが締めかけ中綱、へえんやえんやこれはあれはさのえ、エンヤリヨウ。へげにも上なき獅子王の、萬歳千秋限りなく、牡丹は家の物にして、お江戸の恵みぞありがたき。

し、勸進帳と名付けつつ、高らかにこそ読み上げけれ。

へ士卒がはこぶ広台に、白綾袴一重、加賀絹あまた取り揃え、御前へこそは直しけれ。へこは嬉しやと山伏も、しずしず立って歩まれけり。へすわや我が若あやしむるは、一期の浮沈こなりと、おのおの後へ立ちかかる。へ金剛杖をおつ取って、さんざんに打擲す。へ通れとこそはのしりぬ。へかたがたは何故に、かほど賤しき強力に、太刀かたなを抜き給うは、目垂れ顔のふるまい、憶病のいたりかと、みな山伏は、打刀抜きかけて、勇みかかれるありさまは、いかなる天魔鬼神も、恐れつべうぞ見えにける。

へ士卒を引き連れ関守は、門の内へぞ入りける。へついに泣かぬ弁慶も、一期の涙ぞ殊勝なる。へ判官御手を取り給い、へ鎧に添いし袖枕、かたしく隙も波の上、あるときは舟に浮かび、風波に身をまかせ、またある時は山背の、馬踏も見えぬ雪の中に、海少しあり夕浪の、立ち来る音や須磨明石、とかく三年の程もなく痛むしやと、しおれかかりし鬼あざみ、霜に露置くばかりなり。へ互いに袖を引き連れて、いざさせ給えの折柄に、へげにげにこれも心得たり、人の情の盃を、受けて心をとどむとかや。へ今は昔の語り草、へあら恥かしの我が心、一度まみえし女さへ、へ迷いの道の関越えて、今またここに越えかぬる、へ人目の関のやるせなや、へああ悟られぬこそ浮世なれ。

へ面白や山水に、おもしろや山水に、盃を浮かべては、流に引かるる曲水の、手まずさざる袖ふれて、いざや舞を舞おうよ。へもとより弁慶は三塔の遊僧、舞延年の時の和歌。へこれなる山水の、落ちて巖にひびくこそ、鳴るは滝の水、へ鳴るは滝の水。へ鳴るは滝の水、日は照るとも、絶えずとうたり、とくとく立てや手束弓の、心許すな関守の人々、暇申してさらばよとて、笈をおつとり肩にうちかけ、へ虎の尾を踏み毒蛇の口を、のがれたる心地して、陸奥の国へぞ下りける。

七、長唄勸進帳

この曲は「越後獅子」などとともに、長唄の代表曲としてよく知られている。元来、舞踊劇の地(伴奏)として作られたので、歌詞だけをきいていたのでは、意の通じないところがある。それにもかかわらずもはやされているのは、劇としての「勸進帳」が、歌舞伎として知られていること、また音楽としても、多くの他流の特色をとり入れながらもすっきり長唄化され、演奏しやすいことも原因としてあげられよう。いずれにしても、長唄の美点を集大成したといってもいいほどの名曲で、よく演奏される。

作者は三世並木五瓶、作曲は四世杵屋六三郎(のちの六翁)が、一世一代としてその技倆をふるったもので、作曲に三ヶ月を費したと伝えられている。それも、はじめは全曲二上り調の説経節じみた節付だったので、のちに改作して、現今の本調子となったと伝えられている。

なお、初演のときの「勸進帳」は、いわゆる松羽目物の先駆作品であり、また、演奏にあたっては立別れの形式をはじめたことも、特色として知られている。

へ旅の衣は篠懸の、旅の衣は篠懸の、露けき袖やしおるらん。へ時しも頃は如月の、きさらぎの十日の夜、へ月の都を立ち出でて、へこれやこの、行くも帰るも別れては、知るも知らぬも逢坂の、山かくす、霞ぞ春はゆかしける。波路はるかに行く舟の、海津の浦に着きにけり。へいざ通らんと旅衣、関のこなたに立ちかかる。へそれ山伏といっぱ、役の優婆塞の行義をうけ、即身即仏の本体を、ここにてうちとめ給わんこと、明王の照覧計り難う、熊野権現の御罰当らんこと、立どころにおいて疑いあるべからず、俺阿毘羅咩欠と、珠数さらさらとおし揉んだり。へもとより勸進帳のあらばこそ、笈の内より往來の、巻物一卷取り出だ

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそお出かけ下さいまして、ありがとうございます。また、何かと不行届の点もありましたが、お許しを願いました。どうぞごゆっくりとお楽しみ下さいますよう、お願い申し上げます。

今までは、このようにしてまとまって鑑賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようとして、出演者も一生懸命でござります。これからもどうぞ続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますようお願い申し上げます。

来年も三月八日(日)に、このホールでの演奏会を予定しております。番組がままりましたら御案内をお送りいたしますので、はさみ込みのアンケート用紙に、おとところ、お名前をお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おききました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願いを申し上げます。

ありがとうございます。